

湾曲した薄鋼板で支えられた家

ヨコミゾマコト
MAKOTO YOKOMIZO

設計：aat+ヨコミゾマコト建築設計事務所



4階テラス 左は浴室



3階リビングからキッチン方向を見る



南面全景



地下1階ギャラリー
「親子の肖像」ブルース・オズボーン写真展の写真展
2006年7～9月に愛知県児童総合センターにて開催された写真展の記録展
(展示写真：Bruce Osborn)

FBリブで補強された薄鋼板を湾曲させて構造体として使うことは、「富弘美術館」で実証済みであった。しかし、平屋建てであったそれに対し、この「NYH」は4層に積み重ねることが1つの挑戦であった。この方法の汎用性を実証したいと思っていたので、構造家の佐藤淳氏の繊細な解析によって成立することが確認され、工場で原寸組立された本体を見た時には、かなり感動したことを覚えている。部屋と部屋の間仕切りを構造体として利用することは決して珍しいことではないが、その間仕切り兼用の構造体が極端に薄くなり、そして円くなった時に何が変わるのだろうか？

まず薄さについてだが、われわれが日常的に間仕切り、つまり非構造壁と認識するのは壁自体がどのくらいの厚みとなった時だろう。コンクリート造であれば、シングル配筋であっても座屈を考慮すれば通常の階高から逆算して120mm程度の厚みになってしまう。華奢な木造でも鉛直力を受ける柱として60mm程度のものを、構造用合板で両面から挟んで12+60+12となり合計84mm厚、確かに木造なら日常的に非構造壁も構造壁も連続的

に区別なく認識してしまっている。つまり、どこが構造壁でどこが非構造壁かをあまり気にしないで対象を見てしまっている。では、その84mmを下回るとしたら…。そこで1つの仮定として建具の厚みを想定した。それは40mmである。建具は可動なものであり、構造体である訳はない。仮に40mm厚の壁が目前にあった時、それはまるで建具のように軽快に見えるに違いないと考えたのである。また、その壁の向こう側とこちら側の関係も一応は仕切られてはいるが、どことなく気配を感じるような緩い仕切れ方をすることに違いないと考えたのである。その薄い壁が真っすぐではなく円くなった時に、その仕切れ方の緩さが助長される。部屋に角がないことにより、その空気は常に動きやすい状態にあるように感じられるのだ。普段はふわふわとその場に漂っているものが、人が部屋から部屋に移動する時、それに引きずられるように一緒に移動するよう感じられる。どこかの開口部から風が吹き込めば、それによって幾つもの部屋の空気が一斉に動き始めるように感じられる。各層、異なる壁配置をしていることが大きな特徴

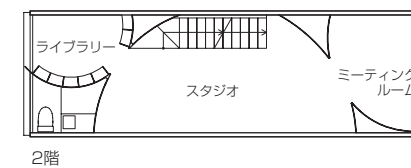
である。上下4層を縦に貫く構造壁はない。配管はすべて外部に出しているために、上下階で水まわりが重なる必要もない。階段の床開口を通じて上下階が緩くつながっている。このことにより、各階ごとに微妙に異なる光や開放感・閉鎖感の分布をつくり出すことができた。水まわりの機器に関しては、特に形態の単純さを重視した。*

よこみぞ・まこと—建築家/1962年生まれ。1984年、東京藝術大学建築学科卒業。1986年、同大学大学院修了。1988年、伊東豊雄建築設計事務所入所。2001年、aat+ヨコミゾマコト建築設計事務所設立、現在に至る。東京大学、東京理科大学、法政大学、首都大学東京非常勤講師。東海大学特任准教授。
主な作品：FUN (2002)、TEM (2004)、富弘美術館 (2005)、GSH (2006)、KEM (2006) など。

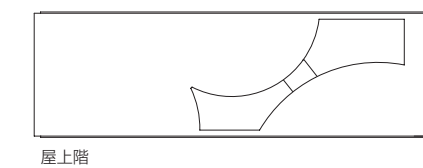
■建築概要

名称：NYH
所在地：愛知県名古屋市
家族構成：夫婦
敷地面積：49.97㎡
建築面積：36.34㎡
延床面積：112.05㎡
規模：地下1階、地上4階
構造：S造
工期：2005.4～2006.4
設計：aat+ヨコミゾマコト建築設計事務所
施工：志水建築

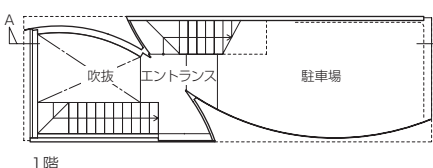
●INAX使用商品●便器：サティス、洗面器：サティス洗面器、水栓金具（洗面）：LF-E340S



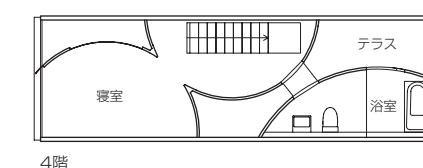
2階



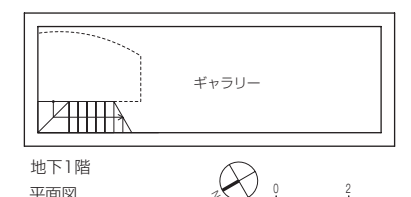
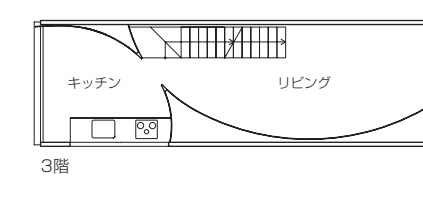
屋上階



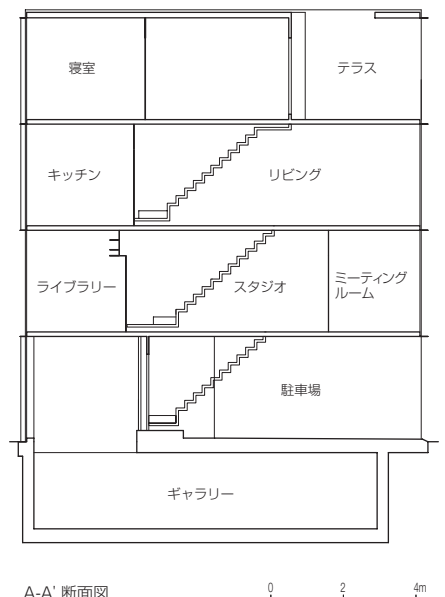
1階



4階

地下1階
平面図

3階



A-A' 断面図